

# TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

IntegrityとIntegrationの歴史的変遷—現代における  
生と死の再考のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小宮山, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1769">https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1769</a>

## 〔課程博士〕 (博士論文審査及び最終試験の結果要旨)

学生氏名：小宮山 陽子

博士論文題目：Integrity と Integration の歴史的変遷—現代における生と死の再考のために

### 博士論文審査：

当該学生から提出された博士論文について、公開発表会が2月18日に行われ、審査委員と学生との間で質疑応答が繰り返され、博士論文としての質を十分に確保しているとの結論に至った。

本博士論文は、「脳死」を人間の死の基準とする論理を世界で初めて構築した米国大統領委員会報告『死を定義する』に登場する integrity と integration という言葉の意味と両者の関係を明らかにし、その問題点を提示することを目的とした歴史研究である。具体的には、integrity と integration という言葉と概念が、13世紀のラテン語 integritas を起点として、15～17世紀に登場してから20世紀後半の「脳死」をめぐる議論に導入されるまでになされた変遷を、神学・論理学・数学・生理学・心理学・精神医学・法医学・生命倫理学などの各領域に跨って検討し、その検討を通じて、脳の機能に基づく死の論理について批判的に考察したものである。

そもそも、13世紀のキリスト教神学において、トマス・アクィナスが用いたラテン語の integritas は、神に由来する「人間の維持すべき身体の完全な状態」を表していた。17世紀になると、英語の integrity が「現象や事物の完全な状態」を意味するようになり、全体を部分との関係から再構成する integration という派生語も誕生した。この integration は、19世紀から20世紀前半の心理学・精神医学・生理学においては、「人間の心・機能・身体の各要素が関連した状態」、あるいは、「その状態をもたらす作用」を意味していた。

ところが、20世紀後半の「脳死」をめぐる米国大統領委員会の議論では、脳を人間の生命の統御器官とすることで、身体の integration が脳という単一器官に還元された。また、そこにおいて、人間の心身の integrity も、脳に統御されるものとなった。integrity と integration という概念は、脳による一極的な統御とは相容れないにもかかわらず、脳の機能に基づく死の論理的根拠となったのである。

このような歴史的変遷を明らかにした本研究は、脳の機能に基づく死の論理には大きな問題があり、「脳死」という概念そのものを根本から問い直す必要性を提示した点で、高く評価できるものである。今後、科学史と生命倫理学の発展に大きく貢献しうる優れた研究だといえる。

以上の点で、本博士論文は、国内外の研究でも類を見ないものであり、当該分野における学術的意義、新規性、独創性を有しており、博士の学位に値することを審査委員一同で確認した。

### 最終試験の結果要旨：

最終試験は2月18日に行われ、審査委員一同出席の下、学生に対して博士論文の内容について最終確認のための質疑応答を行い、その内容は十分であった。また、専門知識については、公開発表会当日の質疑応答時や予備審査時でのディスカッションを含め十分である、と審査委員一同で確認した。

本論文は、主として英語論文の概念分析に基づいており、英語による論文要旨の内容からも、英語の学力は問題ないと判断した。

学位審査基準となる学術論文については、単著論文（小宮山（旧姓：天野）陽子「内部環境概念からホメオスタシス概念への展開—ベルナル、ホールデン、ヘンダーソン、そしてキャノン」『生物学史研究』第90号、27-49頁、2014年）として一編が公表されており、かつ、その論文が、第10回（2015年度）日本科学史学会論文賞を受賞したことも確認した。

また、合同セミナーについては、既定の学習時間および出席回数を満たしていること、ならびに、大学院海洋科学技術研究科が指定した研究者倫理教育を修了していることを確認した。

以上から、当該学生について、博士論文審査、最終試験ともに「合格」と判定した。